

論文

## 2011年～2021年シジミ統計について

On Statistics of Basket Clams, 2011-2021

安木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

2011年～2020年にわが国が輸入したシジミの大部分は、ロシア産に偽装された第三国産ヤマトシジミである可能性が大きい。また、2011年～2019年に輸入されたシジミの内、少なくとも年763トン程度が国内産に偽装されていたと推測される。

キーワード ヤマトシジミ、台湾シジミ、ロシア、中国、韓国、北朝鮮

## 1 問題意識

1991年12月のソ連解体以降、わが国とロシア極東との経済関係は強まっていた。わが国からは中古車を中心に、船外機や日用品などが輸出され、ロシア極東から木材や水産物などを輸入した。こうした貿易の実態を統計資料から考察するのは難しいとされている。例えば、2005年に中古車を手荷物として申告できなくなったが、これ以前は貿易統計には載らなかったもので、正確な輸出量や金額は不明である（高橋 2021、57頁）。また、中古車を分解して部品として輸出する場合も見られ、現時点においても把握は困難である。

一方、ロシアからの海産物の輸入、特にカニに関しては、違法な漁獲と輸出がおこなわれていたと考えられている。喜入亮は、1999年のカニを含む魚介類のロシア側の輸出額が7,000万ドル弱、日本側の輸入額が11億ドル強と、データの違いを指摘した。また、A・ベロフ氏は、1994年～2002年の日ロの魚介類貿易統計における取引額の差の累計を521億ドルと推計した（高橋 2021、56頁）。

本稿で取り上げるシジミに関しては、ロシアの漁獲量と日本の輸入量が大幅に乖離している。ロシアで漁獲されるシジミをはるかに上回る量を、日本は輸入していたことになっている。この場合考えられるのは、ロシアで年間漁獲割当を上回る量を違法に漁獲して輸出しているか、あるいはロシアではない第三国のシジミがロシア産に偽装されているか、のどちらかである。

ロシア極東の主要なシジミ産地である沿海地方ラズドリナヤ河（綏芬河）の三角州はきわめて人口が希薄で、漁業労働者の数は20人未満でしかなく、年間割当量500トンを漁獲できる状況にない。ロシアから輸入したとされるシジミの大部分は、ロシア産ではないことが強く示唆される。また、樺太における年間商業的漁獲量は620トンであり（安木 2021）、もし仮に樺太からシジミが輸出されていたとしても、わが国の輸入量を満たすことができない。

以下では、シジミ研究をする上で欠かすことのできない、シジミ統計をめぐる問題点を明らかにする。

本稿で言う「シジミ」には、ヤマトシジミ *Corbicula japonica*、セタシジミ *Corbicula sandai*、台湾シジミ *Corbicula fluminea* が含まれる。汽水域に生息するのがヤマトシジミ、淡水性がセタシジミと台湾シジミである。セタシ

ジミは琵琶湖固有種である。ロシア、北朝鮮ではヤマトシジミが、台湾、中国では Тайワンシジミが漁獲される。特に、台湾東部・花蓮では Тайワンシジミが養殖されている。他に日本固有種としてマシジミ *Corbicula leana* がいるが、タイワンシジミのシノニムとの説もある (Morton1986、山田ほか 2010、酒井ほか 2014)。近年、北海道を除く全国でタイワンシジミが生息域を広げているが、マシジミもまた近世に入ってやってきた外来種とも考えられている (黒住 2014)。小売店で見られるシジミのほとんどはヤマトシジミである。有名外食チェーンの中には、輸入タイワンシジミを提供するところもある。

## 2 貿易統計

表 1～3 は 2011 年～2021 年まで 11 年間のわが国のシジミ輸入量である。輸入シジミは、表 1「冷凍されたもの」と表 2「生きたまま及び冷蔵されたもの」の 2 つの項目に分けられているが、表 3 で 2 つを合わせた値を示した。輸入シジミにはヤマトシジミもタイワンシジミも含まれる。

ロシアからのシジミ輸入量は、2011 年に 3,719 トンと最大を記録した。その後 2019 年まではほぼ 3,000 トン弱で推移していた。2020 年 1 月を最後にロシアからの輸入は止まった。ただし、表 1～3 には記載していないが、2022 年 2 月に 2 トン、4 月に 25 トンの冷凍シジミはおそらく樺太産である。

ロシアのシジミ産地は、沿海地方ラズドリナヤ河口と、樺太の来知志 (アインスコエ) 湖の 2 か所であり、ラズドリナヤ河口では 2019 年から現在に至るまで、シジミ漁が禁止されている (安木 2021)。また、樺太からの輸入実績はない。したがって、少なくとも 2019 年と 2020 年の「生きたまま及び冷蔵された」シジミはロシア産ではない可能性が極めて大きい。ちなみに、2019 年と 2020 年のロシアからのシジミはすべて「生きたまま及び冷蔵されたもの」である。

また、ラズドリナヤ河口の年間漁獲割当量は 500 トンにすぎず、実績はもっと少ない。さらに、安木 (2021) で示したように、2019 年月別輸入量を見ても季節性は認められないが、ロシアでは漁期が 4 月～10 月で、なぜ漁期以外にも大量のロシア産シジミがわが国向けに輸出されているのか、説明できない。なぜなら、ロシア産シジミのほとんどは冷凍しておらず、長期間保存することはできないか

らだ。加工場周辺にシジミ用の生簀等の設備はない。

すなわち、少なくとも 2011 年以降、第三国で漁獲されたシジミが、日本に入ってくる前に、ロシア産として産地偽装されていることになる。このロシア産シジミを、場合によっては国内産に偽装する（例えば、『中日新聞』、2016 年 2 月 10 日付。三重県四日市市の一久水産が、ロシア産 24 トンを三重県産と偽って 3～4 年前から販売）という、二重の偽装が行われてきたと考えられる。

上記三重県の事例では、シジミだけでなく韓国産アサリ *Ruditapes philippinarum* の産地偽装もおこなわれていた。ロシア産シジミは韓国の業者より買い付けたものと思われる。

日本周辺のシジミの産地は、中国、台湾、ロシア、韓国、北朝鮮であり、ロシア産シジミとされているものは、消去法的に考えると、北朝鮮で漁獲されたヤマトシジミである可能性が大きい。

想定されるシジミの経路は、以下のものである。韓国の貝類を扱う業者は、ヤマトシジミを中国経由で手に入れる。韓国の貿易統計では、中国からシジミを輸入したことになっている。韓国の業者はロシアの税関申告書等を用意し、ロシアからシジミが輸出されたように見せかける。シジミはおもに下関港で通関するが、この時、日本側は輸入したシジミをロシア産として記録する。卸売業者を通じて、ロシア産として販売されることもあれば、国内産地に偽装されて小売店に渡されることもある。

韓国のシジミをロシア産と偽装するのは考えにくい。わが国の貿易統計から、「生きたまま及び冷蔵されたシジミ」1 トン当たりの価格を計算すると、ロシア産が 170 円前後なのに対し、韓国産は 300 円以上するので、ロシア産に偽装することに合理性がない。

中国産の価格はロシアのものに近い。洪沢湖産タイワンシジミが日本に輸出された実績があるものの（安木 2021）、近年、淮南・江南の内水面漁業は禁止されているため、タイワンシジミは中国からほとんど入ってこない。

おそらくヤマトシジミは遼寧省丹東市から輸出されている。中朝国境の丹東は鴨緑江河口域にあり、バカガイ *Mactra chinensis* の産地として有名だが、バカガイがシジミだと誤解されている。日本語で「蜆」は「しじみ」と読むが、中国では蜆はシジミでない場合がある。例えば、花蜆子はアサリ（花蛤）、黄蜆子はバカ

ガイのことである。丹東はヤマトシジミやタイワンシジミの産地ではない。遼寧省から日本向けにシジミ加工品が輸出されているが、使われているシジミの産地は不明である。

なお、韓国ソウル周辺では、オキシジミ *Cyclina sinensis* がさかんに食用とされるが、オキシジミはシジミとは別種である。日本ではほとんど流通しない。韓国でシジミの料理は、釜山、慶尚、全羅といった、おもに南部で見られる。汁物の具となったり、「フェ（刺身）」のように醤油漬けにして生食したりする。タイワンシジミの生食は台湾でも見られる。

### 3 国内漁獲統計

わが国の農林水産省の漁業統計は、内水面と沿海の漁協から得られたデータを分けて公表している。シジミの場合、内水面漁協による漁獲量はわかるものの、沿海漁協による漁獲量は「その他」に含まれていて示されていない。

三重県は沿海漁協の漁獲データを公開している（三重県ホームページ）。三重県桑名市にある赤須賀漁協提供のデータによると、2011年1,324トン、2012年1,113トン、2013年914トン、2014年～2017年なし、となっている。内水面と桑名を足したシジミ漁獲量の内、桑名の占める割合は2011年12.5パーセント、2012年12.4パーセント、2013年9.8パーセントと、無視できない規模である。

わが国でもロシアでも同じだが、自家消費のためのシジミ漁獲は統計に反映されないことは当然として、少なくとも2011年～2013年の把握可能な国内シジミ漁獲量の1割にあたる沿海漁業分が加算されていない統計をこれまで使っていたことになる。

自家消費を除くわが国のシジミ供給量は、「内水面」漁獲分、「沿海」漁獲分、および「輸入」分から構成されるが、「内水面」と「沿海」の中に外国産が含まれているので、

「総供給量」＝「内水面」＋「沿海」＋「輸入」－「国内産地偽装」

と書ける。

2011年～2013年の国内漁獲量は、桑名の「沿海」分を加えると、2011年10,565トン、2012年8,952トン、2013年9,368トンとなる。貿易統計上、ロシア産の輸入は2020年1月が最後である。表4から算出した2011年～2019年の「内水面」と「沿海」の平均値から、2020年と2021年の「内水面」の平均値を引くと、763トンになる。単純に考えると、ロシア産およびロシア産に偽装されたヤマトシジミが入ってこなくなったことで、国内漁獲量が年763トン減った。2011年～2019年まで、少なくとも年763トンほどのロシア産およびロシア産に偽装されたヤマトシジミが、国内産に偽装されたと推計される。

#### 4 まとめにかえて

2006年10月から北朝鮮産シジミが合法的に輸入できなくなった。また、かつて1万トン以上を輸入していた太湖では、水質汚染等によりシジミが採れなくなった。さらに、2019年からロシア沿海地方ラズドリナヤ河口でのシジミ漁獲が禁止された。これらに加え、新型コロナウイルスの世界的流行により中朝貿易が停止すると、ロシア産シジミと称するものもほとんど輸入されなくなった。

中国と北朝鮮という2大産地を失い、インドからも冷凍シジミを輸入しているが、総量としては、シジミ輸入は激減した。

樺太ではシジミ漁獲量を増やす努力がなされているが、年間620トン程度にとどまっており、もし輸出が始まったとしても、これまでのわが国の輸入量を満たすほどではない。

もはや輸入に依存できないことは明白であり、シジミの国内生産を増やすことが求められている。

※本稿はJSPS 科研費22H03845（基盤研究（B）一般・言語圏地域市場の形成・統合・再編に関する研究：ロシア語圏市場に焦点を当てて（令和4年度～6年度）（研究代表者：徳永昌弘・関西大学商学部教授））の研究成果の一部である。

## 参考文献

川瀬基弘 (2016) 「名古屋市守山区では発見されたタイリクシジミ」『なごやの生物多様性』、3、65 頁～67 頁。

黒住耐二 (2014) 「淡水二枚貝マシジミは近世期の外来種か 遺跡出土貝類からの証明」『高梨学術奨励金年報 (平成 25 年度研究成果概要報告)』、67 頁～73 頁。

酒井治己・高橋俊雄・古丸明 (2014) 「日本産マシジミおよび外来タイワンシジミ類のアロザイム変異と淡水シジミ類の多様性」、*Venus*、72 (1-4)、109 頁～121 頁。

高橋浩 (2021) 『日本とソ連・ロシアの経済関係 戦後から現代まで』、ユーラシア文庫 18、群像社。

安木新一郎 (2021) 「2020 年シジミ輸入動向 ロシア沿海地方におけるシジミ禁漁を中心に」、『ロシア・ユーラシアの社会』、1056、2021 年 5-6 月号、52 頁～56 頁。

山田充哉・石橋亮・河村功一・古丸明 (2010) 「ミトコンドリア DNA のチトクローム b 塩基配列および形態から見た日本に分布するマシジミ、タイワンシジミの類縁関係」、『日本水産学会誌』、76 (5)、926 頁～932 頁。

Morton, B.(1986) *Corbicula in Asia – an updated synthesis. American malacological Bulletin, special edition, 2, pp113-124.*

『中日新聞』、2016 年 2 月 10 日付。

財務省税関貿易統計。

農林水産省統計。

三重県ホームページ (<https://www.pref.mie.lg.jp/suigi/hp/87025017321.htm>)。

## シジミ統計(年別。2011年～2021年。表1～3:貿易統計。表4:国内漁獲統計)

表1 冷凍されたもの(単位:トン)

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
中国	449	505	563	433	425	370	428	555	453	493	290
台湾	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
ロシア	0	0	0	0	30	0	0	50	0	0	0
インド	37	98	155	137	218	170	211	97	101	100	202
計	486	603	718	570	673	540	639	702	555	593	492

表2 生のまま及び冷蔵されたもの(単位:トン)

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
韓国	73	37	337	82	21	0	0	0	0	99	204
中国	81	691	30	0	0	0	0	0	40	21	40
台湾	390	388	310	286	269	269	156	121	44	230	36
ロシア	3,719	2,684	2,988	2,025	2,077	2,648	2,941	2,921	2,797	213	0
計	4,263	3,801	3,664	2,393	2,368	2,916	3,096	3,042	2,882	563	280

表3 表1と表2の合計(単位:トン)

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
韓国	73	37	337	82	21	0	0	0	0	99	204
中国	530	1,196	593	433	425	370	428	555	493	514	329
台湾	390	388	310	286	269	269	156	122	44	230	36
インド	37	98	155	137	218	170	211	97	101	100	202
ロシア	3,719	2,684	2,988	2,025	2,107	2,648	2,941	2,970	2,797	213	0
計	4,749	4,404	4,382	2,963	3,041	3,456	3,735	3,744	3,436	1,156	772

出所)財務省貿易統計より筆者作成。

表4 わが国のシジミ漁獲量

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
内水面	9,241	7,839	8,454	9,804	9,819	9,580	9,868	9,646	9,520	8,894	8,940
桑名	1,324	1,113	914								
計	10,565	8,952	9,368	9,804	9,819	9,580	9,868	9,646	9,520	8,894	8,940

注)「桑名」の2014年以降の実績はなし。

出所)農林水産省統計および三重県ホームページより筆者作成。